

ニラのネギアザミウマ防除における 薬剤散布ノズルの種類と散布量の評価 2



図1 ネギアザミウマ幼虫の寄生位置

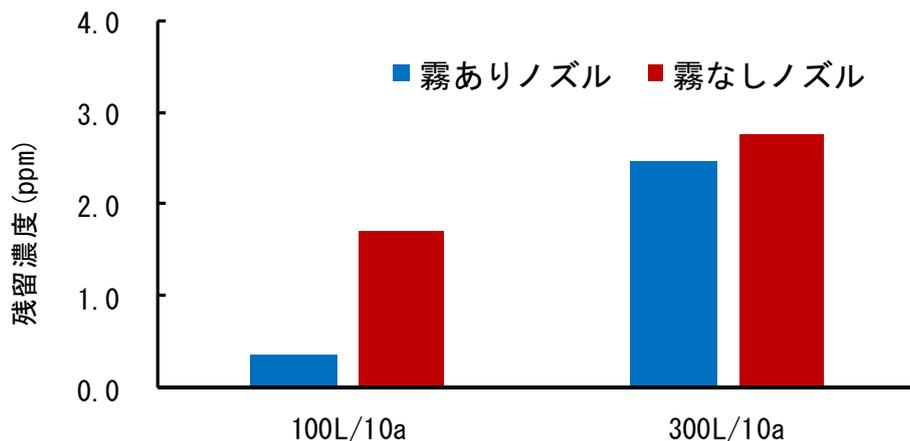


図2 ニラ株元のトルフェンピラド残留濃度

ニラの重要害虫の一つであるネギアザミウマの幼虫は、葉上だけではなく、薬液が到達しにくい葉の株元(葉鞘部)にも寄生しています(図1)。

センターニュース第114号では散布時のノズルの違いによる防除効果を紹介しましたが、今回はニラの株元への農薬の付着について調べた結果をご紹介します。ノズルは114号と同様、霧ありノズルと霧なしノズルの2種類を用いました。

草丈46cmのニラの葉上20cmから、ハチハチ乳剤の1,000倍希釈液を100L/10a、または300L/10a散布し、散布1日後にハチハ

チ乳剤の有効成分であるトルフェンピラドの残留濃度を測定しました。

その結果、株元の残留濃度はいずれの散布量でも霧なしノズルで高くなりました。また、散布量が多いほど残留濃度は高くなり、霧ありノズルではその差が顕著に見られました(図2)。

このことから、株元に寄生している幼虫の防除には散布量が重要であり、特に霧ありノズルでは、散布量が少ないと株全体に薬液が到達しなくなる可能性が推察されました。

(農薬管理担当 島本文子 088-863-4915)